

## 寄稿

### チェルシーフラワーショウから学ぶ

樹木医 伊東伴尾

毎年5月に英国ロンドンで開催されるチェルシーフラワーショウに、内山緑地建設(株)は2007年と2008年にコーディネーター二宮孝治氏(樹木医)ら関係者の協力で開催し「シルバーフローラ賞」を受賞できた。筆者も2008年の出展の設計者として参加したことで、貴重な経験を得ることになった。

#### 1. チェルシーフラワーショウとは

園芸大国とも言われるイギリスでは各地でフラワーショウが開催されている。なかでもチェルシーフラワーショウは、1862年から毎年開催されており、もっとも歴史が古く最も規模の大きな伝統のあるフラワーショウだ。世界各国から600以上の出展者が集まり、約50のガーデンや100を超える花の展示のほか、造園・園芸の関係者が最先端の素材を持ち寄り、展示を行う。準備期間から会期中に至るまでその様子が連日メディアで報道され、5日間の開催期間には16万人もの来園者が訪れる。



(開催会場敷地図)

チェルシーフラワーショウは、近年各国で盛んに開催されているフラワーショウの手本として、また世界のガーデンデザイナ

ーが出展を夢見る舞台として、常に世界の庭文化をリードする最高峰のフラワーショウと言われている。

#### 2. 出展作品レベルの高さ

日本でも近年各地で緑化フェアやガーデンショウ等が開催され、多くのすばらしい作品が出展されるが、これはどうかと思われる作品も混じることも多い。しかし、チェルシーはいずれの作品もすばらしく、どの作品が「ゴールド賞」を得ても良いような感じを受けた。これは、厳しい出展審査の段階で厳選されることにあるのかも知れないが、園芸先進国の事情が窺える。ガーデン部門では約50の出展枠に約600件と15倍の競争率を勝ち残った作品が出展される。また、作品審査も英国ならではの審査事項が含まれる。

##### ◇ 審査事項 (スモールガーデンの場合)

- 1) 書類審査：コンセプト・平面図・パース図・予算・土壌・木材などの環境基準
- 2) 本審査：
  - ア. 概要・趣旨(実現可能性含)：10%
  - イ. 印象(インパクト・独自性等)：20%
  - ウ. デザイン(まとまり・バランス・スケール感)：20%
  - エ. 構造物(デザイン・色とテクスチャー・コンセプトに対する連想性・出来栄)：20%
  - オ. 植栽(デザイン・色とテクスチャー・コンセプトに対する連想性・出来栄)：30%

この審査内容には英国ならではの次のような事項も含まれる。

##### ◇ テーマや環境にあった素材かどうか

例えば「日本の江戸時代の庭」としたら、本当の日本の江戸時代にあった材料か等の時代考証や、また、乾燥・日陰等の生育環境条件にあっているかも審査される。

◇ エイジング

歴史のあるものを大切にする国民性からエイジングの審査も厳しい。当社の出展作品が「かぐや姫の翁の家」の設定で、新しい材木に塗装で古さを表現したが、エイジングが充分でない評価だったようだ。良い賞を得ている作品は本当に錆びた感じや古さをリアルに表現していることに驚く。

■ PrincessMoon かぐや姫の里 (Silver)



(2008 年内山緑地建設(株)出展)

◇ 物語性・ノスタルジア

ガーデンにノスタルジアを求めている傾向がある。<作品例> 2007 年出展作品

The Old Gate Gold / Best Courtyard Garden



(スモールガーデン部門で最高賞を受賞した作品)

<ストーリー>1930 年代のイギリス郊外。老夫婦が慎ましやかにガーデニングを楽しんでいた。しかし巷では大戦の色が濃くなり、老夫婦も花ばかりを育てるわけにいかず、花咲く花壇が徐々に菜園(画面右側)に取って代わっていった。

◇ 新規性

英国の園芸文化の発展を基本にのしているが、海外からの出展や、新しいテーマや技術や素材も積極的に求めている。いわばフラワーショウは園芸文化のインキュベーターの役割を担っているようだ。

■ Fleming's & Trailfinders Austrarian Garden



(オーストラリアの素材使用作品)

■ The Daily Telegraph Garden (Gold)



(日本石庭デザインを模した池)

3. 来場者のガーデン知識レベルの高さ

開催期間中、出展作品前でリーフレットの配布を行ったので、来場者の反応を身近に感じる事ができた。多くの人から、植物の種類や色彩や管理方法・かぐや姫の物語・垣根や背負子等々についての質問や感想が述べられた。それらは奥深いものも多く、学名を良く知っているのにも驚かされた。

日本での緑化フェア等では「きれいですね。」程度の感想で終わるところが、ガーデン知識レベルの高さを感じさせ、園芸大国民性的一端を知ることになった。



(スモールガーデン前の来場者の流れ)

#### 4. 園芸文化の担い手

これらの高い園芸文化を支えているものになにがあるのだろうか。背景を考えてみた。

##### ◇ 風土と歴史

英国は緩やかな丘陵地に田園風景が広がり（日本は山岳地と丘陵地）、森林率は8%（日本は68%）、高等動植物1623種（日本は5565種）、固有種1%（日本は56%）で、日本と比較すると自然度の少ない風土である。



(英国の田園風景)

英国もかつては豊かな自然があったが、16～18世紀での囲い込み運動や18世紀の産業革命で自然林は農地や都市に変わっていき、自然度の少ない田園や荒廃した都市環境が増えていった。18世紀にはそれらへの反動で、詩人や哲学者等が豊かな自然を求めるようになり、その後の英国式風景庭園やナショナルトラスト運動につながっていく。

19世紀には植民地のオーストラリアやニュージーランドで、理想的な街づくり手法として田園都市の原型が創られ大英帝国の宗主国にはガーデンシティや園芸文化を

大切にする国民性が根付いたのだろうか。



(Stowe Landscape Gardens)

また、氷河期や森林伐採で失われた生物種も多く、それらを補うべく、プラントハンターが世界の物を収集したり、園芸種の増殖が多く行



(1876 アデレード計画)

われたことも園芸大国の基礎となっているのだろう。

##### ◇ 宗教

Garden の語源はヘブライ語のガント(保護)とエデン(理想郷)の合成語との説もあるが、英国人は Garden を持つことが、魂の癒しを受ける場として捉えているのではないだろうか。英国の諺にこのようなものがある。

- ・ 3時間を楽しむなら、お酒を飲みなさい。
- ・ 3年楽しむのであれば結婚しなさい。
- ・ 一生楽しみたいなら Garden を持ちなさい。

##### ◇ 園芸好きな国民性

英国民の理想は、田園風景に囲まれた郊外で、歴史ある建築物に住み、ガーデンライフ送ることとされている。また、Garden は単なる審美性のある空間でなく、ガーデンパーティーとしての交際場・家族団欒の場・健康維持・菜園・遊び場・家の誇り等、多様な目的空間で、生活に不可

欠な空間なのだ。

また、英国は紅茶文化も有名で、木陰で小鳥の声聴き、草花に包まれた **garden** での紅茶談義は理想なのだ。これらも園芸文化が支えている。



(Afternoon Tea)

#### ◇ ガーデンセンター

この園芸文化を支えているのがガーデンセンターで、単なる園芸材料を売るセンターでない。様々な園芸情報を発信し園芸分文化の支援拠点となっている。また、楽しい時間を過ごす場であり、植物園機能も有している。

(事業アイテム)

- ・ 素材・半製品・製品の販売
- ・ 設計・工事支援
- ・ モデル庭園・子供の遊ぶ場・カフェテラス等



(高品質なアイテムがあるガーデンセンター)

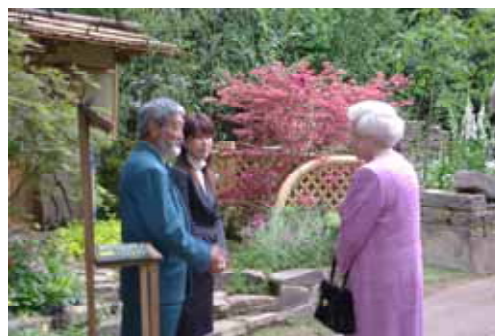
多様な事業の品質も高く、販売価格も高いが、消費者は満足して購入し、園芸文化を享受している。

#### ◇ フラワーショウは「ハレ」の場

チェルシーフラワーショウには「ハレ」の場の側面がある。5月のフラワーショウは英国国民の祭りでありイベントなのだ。開催期間には **BBC** が特番を組んで放映し、多

くの市民がショウに出かけて楽しみ、園芸文化のトレンドをつかんで満足する。

また、上流社会の人々が訪れる日設定されていて、交流の場としても位置づけられている。主催者の総裁であるエリザベス女王も来場され、幸運にも内山緑地建設(株)出展庭園に2年続けて立ち寄られ、担当者にお声をかけていただく光栄に預かった。



(スタッフに声をかけるエリザベス女王)

### 5. チェルシーから学ぶもの

これまで、述べてきたように、英国の園芸文化の発展には、長い歴史の中で育まれたことを感じる。ユーラシア大陸の東に位置する日本は、西に位置する英国と自然風景を愛する国民性を有することの共通点があるので、英国の園芸文化の発展から基調を受け入れことは可能である。チェルシーフラワーショウに参加して、次のようなヒントを得られた。これらは既に日本でも行われているが、組織的に力強く進めることで、展望の見えにくい造園・園芸分野に、一つの光明につながるのではないだろうか。

#### <発展のキーワード>

- ・ 園芸文化を生活の豊かさとして高める。
- ・ 発展を持続する場やシステムの構築
- ・ 官学民一体で取り組む
- ・ 文化の情報発信とサポート拠点の創設

(資料・写真提供)

内山緑地建設(株) 鳥飼寛子・増田華絵